
高嶺の彼女と異質な彼

笑うパンダ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

高嶺の彼女と異質な彼

【Nコード】

N6876K

【作者名】

笑うパンダ

【あらすじ】

北山中学校のアイドル白柳^{しろやなぎ}澪^{みお}はある時、図書室で上代^{かみしろ}葉^{よう}に一目ぼれした。彼はどこにでもいる影の薄い生徒であったが、その本質は凡人には理解できないことを理解する異質な人間であった。これは高嶺の彼女と異質な彼の物語である。

プロローグ（前書き）

初投稿作品です。下手ですみませんが、よろしくお願いします。

プロローグ

初めての感覚だった。

その人を見たとき、私の体のすべてが硬直し、まるで時間が止まったように感じた。

私はこの感情は最初はさっぱりわからなかった。

しかし、考えたら、すぐに理解してしまった。

ああ、これは恋なのだと

今まで、何十回も伝え続けられたが、自信は経験したことのない感情

これには混乱をしたが、すぐに深呼吸をし、持ち直す。

私は手を握りしめ、前をむいた。

そして、自然と声がでていた

「すっ好きです！ 付き合ってください！」

「断る。では失礼」（スタスタ、ピシャ）

えっ ・ ・ ・ ・ ・

学園のアイドル「初恋」前書き

まず、彼女の話からです。

学園のアイドル「初恋」

白柳^{しろやなぎ みお}は北山中学のアイドルである

成績は常に1位

体育もそつなくこなす程の運動神経を持ち

綺麗な長い黒髪、整った顔立ち、締まるところも締まったスタイル

要するに美人である

性格もその実力を鼻に掛けることがないから困ったものである

当然、男子からは人気があり、女子からは憧れの存在である。

季節は少し肌寒くなっている秋

北山中学の屋上

そこに男の子と明らかに美人と言えるだろう女の子がいた

「澪さまっ・いえ、白柳さん！！！」

明らかに様付で読んでしまっているので、言い直しても遅いように思う

しかし、いつものことなので、気にしない

「なんですか？」

まあ、言われることは予測しているが

「一目見たときから好きでした！僕と付き合ってください！」

私は小さくため息をもらす

やっぱり、これでもう30回目ぐらいになるかな？

「ごめんなさい。あなたのことは嫌いではありませんけど、付き合う気はありません」

いつもど通りの返事を返すわたし

そして、私は踵を返して、屋上からでるために歩く

「えっ、ちょっ、待ってくださいっ！いい！」

待つわけがない。これからすぐ、生徒会の仕事なのだ。

まして、副生徒会長である私がいなければ、仕事がいつもどおり進まないのだ

かまわず、早足で生徒会へ向かった

校舎の2階のちょうど真ん中にあるのが生徒会室

昔から続く伝統校だけに生徒会室もその年代が感じられる部屋である

おかつぱ頭の女の子が私に気が付いた。

「あ、澪さん、お疲れ様です。」

生徒会の書記である2年の宮森美園^{みやもりみその}ちゃんが満面の笑みで私を迎えてくれた

それに順じて他の会員も挨拶をする

「「「お疲れ様です」「」」

「ごめんね、少し遅れちゃったでしょう?」

私は少し申し訳ない気持ちで言った

「気にしないで下さい。今日はそんなに仕事はありませんし、まして、漑さんに頼ってばかりもいられませんから」

この子は投げやりな生徒会長と違って頑張り屋でいい子だなあ。

実際、この子は会長より働いてるしね

「漑様っ！今日も告白されたのでしょうか！？」

ポニーテールの女の子がウルウルした目で私に質問する。

「まつ、まあね」

少し引きながら答えた

「まったく！身の程知らずにも程があります！！」

「漑さまは、男などに興味は微塵もないのに！懲りずに私たちの女神様に手を出そうとするなんて」

まわりの会員がビビっている

また、勝手に言ってくれるわ

この子は1年の岡田瞳^{おかだひとみ}、優秀な生徒会員であるが言葉から分かるとおり百合である。

私は盛大にため息をついた

確かに今、男に興味はないけど、だからと言って百合というわけじゃないのに。

単純に恋愛にそれほど魅力を感じないだけ

ただ、それだけなのに一部の女子生徒からは女の子しか興味を持ってないと思われ、熱烈なアツクを受けたことが多々ある

実際、瞳からも何度が受けている。

まあ、ここで色々言っても無駄だし、生徒会役員としては優秀だからいいんだけど

私は瞳を無視して美園ちゃんに話しかけた。

「美園ちゃん、どんな仕事が残ってるの？」

ファイルを見ながら美園ちゃんが答える

「部活の予算確認だけですなえ。これなら私と残りの会員だけできますよ。」

「それなら、今日はお願いできるかしら。」

「はい。あつ、ちょっと待ってください。」

「何？」

「図書委員から今度、買う本の注文書をもらうことになってたので

すが、まだ来てないんです。」

「ああ、確認に行けばいいのね」

「お願いできますか？」

「気にしないでよ。ちょうど、借りてた本も返したいから、ちょうどいいわ」

「じゃあ、澪さんお願いします。」

「はい、任せました」

私は鞆を持って生徒会室を出た。

生徒会室があり、1、2、3年の教室がある新校舎その隣に木造の旧校舎がある。

数年前に建てられたばかりの新校舎とは違い、数十年前に学校が出来た当時からあるので所々古びている。

今では、クラブの部室として主に使われおり、図書室はその3階の端っこにある。

私はそこに向かってギシギシ鳴る木造の床を歩いている

この音を聞くと、大丈夫かこの建物？と思うことがあるが、前に私と同じように思っていたクラブの生徒たちが学校側に不安を訴えたことがあったらしい

そこで専門家に見てもらったそうだが、結果は基礎がしっかりとしているので全く問題がないとでた。

しかし、安全と言われても何だか不安に思ってしまうのはなぜだろうか？

ガラッ

私は図書館の扉を開いた。

この学校の図書館は古いながら、なかなか広く多くの蔵書量誇る。

といっても私は読みたい本は自分のものにしないと気がすまないの
で、参考書や生徒会に使う資料以外借りることはない。

「すみません、図書委員いますか？」

・
・
・
・

返事はない

カウンターを覗いてみるが、誰もいない

もしかしたら、本棚の方で整理をしているのかもしれない

文学、言語、芸術・それぞれの分類の所を確認しながら、奥へ行く
いくら奥に行っても誰もいない。今の時間は人はほとんどいないみたいだ

「あつ、いた」

一番奥の社会科学の所にどこにでもいそうな男の子がちょうど本を戻している

「すみません」

男の子はゆつくりとこちらを向いた

私は彼の目をみた途端

「!!」
「!!っはあっ!」

えっ!何っ!一瞬息が止まっちゃった

鼓動が速くなって、いやだ、抑まらない

息苦しい〜

「何?」

男の子が無表情で聞いてくる

「えっと、いや、えっとね」

だめ、考えがまとまらない

「用がないなら、失礼していいか？」

彼は淡々と言ってくる

「まっ、待って！」

私は必死で今の状態を把握しようとする

いや、私はもう気づいている、初めてだから焦ってるだけ

こっこれは、こっ恋ね！！まさか、こんなに苦しいなんて

私は彼を見た、見た感じはどこにでもある少し影が薄そうな男の子である

でも、彼の目は他の男の子たちと全く違う。とても引き込まれる目をしている

「だから、何？」

また、淡々と言ってくる

ああ、何か言わなければ

私は混乱した状態で必死で考えた

・
・
・
・

・ ・ ・ ・ ・

「すっ好きです！ 付き合ってください！」

あっ、言っちゃった

失恋と不屈の精神（前書き）

サスペンスはまだ先なので気長に待ってもらえとうれしいです。
あと、感想、批評、要望（取り入れるかわかりませんが）、誤字脱
字報告など気軽にお願いします

失恋と不屈の精神

「断る。では失礼」

彼はそう言つと鞆を持ってスタスタと行つてしまつた

ガラッ、ピシャッ

えっ えっ えっ ～～～～～～～～～

私何を言つて、いや、でも、あんな返事、どうして、あたりまえ、しかし、あ～～～～～～～～～帰る・・・

私は真つ白になった頭でそのまま鞆を持つて出る

「あつ、澪さん！すいません。注文書提出するの忘れてました。」

誰かが声をかけてくるが、気にしない。帰るのだ

「おっ怒ってるのですか！申し訳ありません。 漣さん！次からこんなことがないようにしますから！！」

知らない、知らない、帰る

「みつ 漣様~~~~、お許しを~~~~」

私はダッシュで家に帰り、ぼろっとした頭で何も考えれず機械的にご飯を食べ、風呂に入り、髪も乾かさずにすぐ寝た。

「漚ー！ 起きなさい！」

最悪な朝だった。とても眠い、体は重い、髪はボサボサだ
でも、最悪なのはそんなことではない

私は昨日のことを思い出した

（「好きです。付き合ってください！」）

バタツバタツ！

恥ずかしい〜〜

しばらく布団の中で悶えたあと、私は思考に意識を移した

いくら混乱していたとしても、いきなり、告白しちゃうなんて

まあ、なんでそうしちゃったかは検討はつくけど

私は顔をだして、本棚を見た。そこには、最近人気の恋愛小説 春
野雪見著「恋愛超特急シリーズ」が置かれている。

その内容はお互いが一目ぼれして、付き合い始め、あらゆる障害を
ものともせず、二人の道に行く純恋愛ものだ。

私はこれのファンで、いつも二人が愛に忠実で行動していることにドキドキしながら読んでいる

いつかは自分も、とずっと先の将来の恋愛に心躍らせていたけど

まさか、こんなに早く来るなんて、深くにも焦ってしまった。それに

（「断る。」）

布団から出て、棚の鏡で自分の顔を見る

髪はボサボサになっているが、それ以外は整っているし、スタイルだって悪くないと思う。

胸はさびしいがまだ中学生だ、成長する。

私はナルシストではないけど、今まで結構、告白されてきたし、常に顔や体が変わらないか気を配ってもきた。

だから、自分が美人の部類に入っていることを自覚している

いきなりとは、いえ告白されたら、普通は驚いて、何か色々返してきそうなものなのに。

彼は無表情で即座に断った

「ということは私に全く魅力を感じてないのよね」

私は本日2回目である盛大のため息をはく

初恋と同時に失恋を体験とは信じられないな

私は顔を上げ、昨日、会った彼の姿と印象的な目を思い浮かべた。

心臓の鼓動がとても速くなってきた

さようなら、私の初恋の人

ふと、恋愛超特急の主人公、洋子のセリフを思い出した

（「私は彼を思つとまだ、ドキドキしてるのこれがある限り恋は終わらないわ!!」）

いや

・
まだ

・
・
・
・
終わってない・・・！

私は鏡の自分を見据え、前で握り拳を作った

そうだ、彼のことがまだ、好きなのだ。

例え、この初恋が実らないものだとしても、簡単に終わらせてなるものか！！

そうと決まれば行動だ。勢いよく部屋を飛び出した

「あっおはよう、ママ！」

「みつ漣、起きてたの？起きてたなら速く降りてきてよ」

「ごめんね。すぐ身支度整えて行くから」

「何か今日は元気ね。まあ、早くして頂戴ね」

「はい」

洗面所に向かう

あつ、そういえば私は彼の名前もクラスも、同じ学年かも知らない

「まずは、情報ね。どういう人なのか調べなきゃ」

急いで髪を整えながら、私はどのように調べるか考えていた。

彼女の親友（前書き）

少し書き直しました

彼女の親友

秋の肌寒さを感じさせる中、私は学校へ行く道を急いでいる

考え事のせいで、いつもより遅く出てしまった

別にゆっくり行っても十分学校に間に合う時間だが、私は人を待たせているので急がなければならない

ちょうど、角を曲がった先に、制服をきたポニーテールの背の高い女の子が立っている

彼女はこちらに気づき、大きく手を振ってきた

「あつ、おはよう！ 漣」

「おはよう、紗枝」

安藤紗枝、私の幼い頃からの親友で、登校する時はいつも一緒に通うようにしている

「遅れてくるなんて、めずらしいじゃない。いつもは私より必ず先に来るのに」

紗枝は不思議そうに言った。

私はそれに申し訳ない顔をしながら答えた

「ごめんなさい。ちょっと寝坊しちゃって・・・」

紗枝は首を傾げた

「寝坊かー、これもまためずら・・・、うん？」

急に目を細めてこちらを見てくる

「うーん」

唸りながらずっと見てくるので、私は何だか居心地が悪くなって聞いてみた

「何？」

紗枝は小さなため息をはいて、ズバリ

「あなた何か、深く悩んでて、遅れたでしょう!？」

私はとても焦った!

「なっ、なんでそう思うのよ。」

紗枝は呆れながら答える

「何年の付き合いだと思ってるの?。」

私の目をまた、じっと見てくる。じっ、じまかせない！

「うー」

唸るしかない私、本当にわかるものなの？

うれしいような、いやなような　あぁっ！

「でも、ひさしぶりね。あなたがそういうことになっているのを見るのは」

紗枝は懐かしそうに言ってきたので、私はとぼける

「そ、そうだっけ？」

「そうよ、あなたが小学生にして初めて告白を受けた時以来ね」

「ッ！！」

確信した口調で言ってきたので、私は一瞬で思い出し、顔が赤くな
った

よくおぼてるな。うー、思い出してしまった・・・

小学4年ぐらいの時だった

今でこそ告白慣れをしている私だが、当然、初めての時もあり、慣れてもなかった

別のクラスだったか、ある男子に呼び出されて告白された

返事は明日でいいと言われたので、私はその夜、どうやって返事をしたものかと悩んだ。

相手のことは好きではないが、断ったら相手は大いに傷ついてしまうのではないか

でも、好きでもないのに受けることも、絶対に嫌だ！

どうしようか、どうしようかとオロオロしながらずっと考え、ついには朝になってしまった

そうしてどうしようもなくなった所で、朝、紗枝にあったところでそのまま泣きついていた

自分が考えていたことを全て切々と伝えたら、疲れた顔の紗枝が

（「好きじゃないなら、断れ！！」）

と怒鳴った。

これのおかげで私はハッキリと断るということを覚えたのである

「あの時みたいに長々と泣きつかれるのは嫌だよ」

紗枝はあの時のことを鮮明に思い出したのか、本当に嫌そうな顔で言ってきた

私は過去のことを言われたので少し、ムツとした

「むっ昔のままの私じゃないのだから、そんなことはもうしないよ」

「本当かな」

紗枝は疑いの目で見てくる

「さあ、早く行かないと学校に遅れるよ」

私は話題を終わらすため、急いで学校に歩き始めた。

「あつ、待つてよ」

紗枝も急いで追いかけてきた

「ねえ、漣。ああ言っただけど、
本当は泣きつきたくなったら、泣きついていいんだよ」

紗枝は心配そうに言った

「ありがとう。でも、大丈夫だから、今は何も言わないで」

そうだ、昔の自分と今の自分は違う、やってみるのだ

「わかった。ほどほどにね」

紗枝が肩をポンッと叩く

あゝ、やっぱり親友っていいわね

しばらく歩くと、学校の校門が見えてきた。

同時に、登校中の生徒たちも多くなってきた。その大半がこちらをチラチラ見ている

いつものことだが、いい加減、飽きて欲しいな

紗枝はいつものことなので、気にせず私に話しかけてくれる

「あつ、そういえば昨日担当の図書委員からいきなり、電話きたのよ」

紗枝は体を動かすのが好きな方だが、読書もそれなりに好きなので、図書委員をしている。

「ふゝん、何だったの？」

「何かあなたに許しを請いたいとか、伝えてくれとか、意味わかんなくてすぐ切ったけど」

私は首を傾げた

「何それ？」

「全く覚えがないの？」

紗枝は私の顔を覗き込んでくる

「うーん、そういえば何か昨日帰る時に話しかけられたような」

私は思い出そうと必死に頭を抱える

「その程度ってことは、これは悩みに関係ないわね」

「もう、紗枝！今は何も言わないでって！」

紗枝に顔を即座に向けた。あつ

「あー！！！」

「どっとうしたの！？」

紗枝が驚いて前を見ると、とても中学生には見えない背と顔をもつ男子生徒がこちらを見ていた

「あー、結城君ね。相変わらず大きいなって今さら驚くことないじゃないの」

そうじゃない！

結城輝幸はまるで山男のような姿で周りから怖がられているが、実際の所は、温和で優しい性格らしいと友人から聞いている（もちろん紗枝もそれを知っている）

「そうか、彼がいるのは、いつもより遅く登校したからか。気にする必要ないよ

周りと同じでただ、あなたを見てるだけだから」

そんなことはわかっている、そうじゃないのだ

私が驚いのは、さっきまで結城君の隣りを一緒に歩いていた男子生徒

彼は止まらずにそのまま玄関に向かってしまった

はっ！追いかけてくちや！！

彼女の親友（後書き）

あれ／＼なかなか、彼へと移行できない

彼の友達？（前書き）

遅く更新申し訳ありません！
今までの話を少し、手直ししました。特に前話の最後は書き直しました

彼の友達？

早朝のある一軒家から美味しそうな匂いがしている。

その家の匂いのもとである台所で男が何かを作っていた。

「これをこっちで、あれはこれで・・・」

男はとても大きな背中を揺らしながら手を動かしている

・
・
・
・
・
・

「よしっ、出来た！」

ハンバーグ、キャベツ、スパゲッティ、ミニトマト、そして、ご飯。
これらは無駄なくきっちり弁当箱に入っている。

僕は思わずこの出来栄に笑みがこぼれた

「ふふっ」

ただ、弁当箱に詰める作業なのだけど、僕は弁当を作るときは一番大事だと思う。

料理は時間のない朝なので、パツパツと作らなきゃいけない。だから、自分がある程度納得できる味でいい（妹は「これである程度！？」って驚いていたけど）。

しかし、料理を詰める時は、注意しなければならない。

初めて弁当を作った時、何も考えず適当に入れたら、昼食時にぐちゃぐちゃの弁当の中身と対面してしまった。

あれを思い出す度に、犠牲になった料理に対する悔しさを思い出す。それから、気をつけるようにしていたのだが、思ったような見栄えにはならず、詰めすぎると見苦しくなり、逆にあまり詰めないと偏ってしまう。

試行錯誤の上、理想的な見栄えを保てる詰め方を今日やっと習得したのだ。

僕は弁当を見ながら、その努力を思い出していた。

ふと、時計を見ると時間が迫っていることに気がつく

「あつ、もうこんな時間だ！早くしないと」

僕は用意をしながら、居間でテレビを見ている妹に声をかける

「鈴〜！出るけど、遅刻しないでよ〜」

僕達の両親は共働きなので、朝はいつもとても早く出てしまう。だから、僕が急かさないと、ルーズな鈴はつい時間を忘れてしまうこ

とがある

「はい」

鈴は朗らかな声で返事をした。

まあ、ちゃんと返事をしたなら、大丈夫だろう

「じゃあ、行つてきまーす！」

玄関を出て歩くと同じく登校している多くの学生がいた。

その中で近くを歩いていた人達は僕に気づくと大部分はいそいそと離れた。

僕はそれを見て、ため息を吐く

「はあ」

まあ、いいけどね。それでも前よりは良くなった。

最初の頃はまるで海が割れる奇跡のように道を開けられていた

僕、結城輝幸ゆづき てるゆきはまず、初めて会った時は大抵、怖がられる。何故なら、大男だからだ。

小学校低学年までは、普通だったのに高学年からぐんぐんと背が伸び、現在、中学2年時では180cmまで伸びてしまった。

ただ背が伸びただけなら、よかったのだけど、肩幅も大きくなり、

まるで巨人のようになってしまった。

それプラス、生来のゴツイ顔つきが合い合わさって、怖がられる結果になってしまった。

実際の僕は見た目と逆で気が弱く、趣味は料理と裁縫の人畜無害なのに

そう歩きながら考えていると、ふと僕はある男子生徒に気がついた。

僕は彼に近づくため急ぎ足で歩いた。

周りの生徒はその行動に驚く

「うあっ」「ひっ」「ッ！」

「おはよう、上代君。」

追いついたので、僕は彼に声をかけた。

彼はこちらを振り向くと、特に僕は怖がることなく無表情で答える

「おはよう」

「一緒にいい？」

僕は断られることがないことを知っているが、それを理解しているのが、うれしいのでいつも聞いてしまう。

「いいよ」

上代君は気にせず、答えた。

そして、二人並んで歩く

「そういえば、今日の数学の宿題やった？」

上代君はそっけなく返す

「やった」

「結構、多かったね」

「そうか？」

また、そっけなく返す

「そうだよ」

いつも、通りの会話だ。

思えばクラスで初めてまともに会話したのは上代君こと上代葉だった。

1年の時、クラスの生徒からも怖がられる中、上代君だけは普通に接してくれていた。

いや、くれたのではなくただ、興味がなかったただけだと思うけど、僕にはそれが嬉しかった。

こちらから話しかけても、大抵、興味無く返すけど、少なくともむげにはしないし、興味を持った時はすごい

そんなこんなで一緒に登校するまでの仲になった。

上代君が僕に関して友情を感じているか、よくわからないけど少なくとも僕は上代君のことは友達だっと思ってている。

僕は彼を見る。

見た目はどこにでもいそうな影の薄そうな男子で僕を見ると真っ先に逃げそうなタイプだ。

人間、僕を含めてわからないものだな。

「何？」

視線に気がついたようで、こちらを向いて聞いてきた。

「ごめん、なんでもないよ」

「ふん」

特に何を思ったわけでもなく、上代君は前を向いた。
そのまま、僕もまた前を向いた

「あつ、漑さんだ」

北山中学のアイドル「白柳漑」容姿端麗、頭脳明晰しかも副生徒会長、

あゝあ、僕みたいな大男とは接点なんて持てないだろうな

あれ？何かこちら見て驚いている？うつつ、驚いた顔もかわいいな
上代君にこのことを伝えようと横を向いた

「あれいない？先に、行っちゃった。まっ、待ってよ！」

僕は急いで靴箱に向かった。

せつかく漑さんがこっち向いていたのに

まあ、興味ないか、逆に興味を持っている上代君は想像できないし

苦笑しながら僕は急いで後を追った

この時、僕は後に漑さんとまさか、接点をもつことになるとは想像にもしていなかった。

しかも、それが上代君絡みでだなんて

彼の友達？（後書き）

次はできれば、早く更新できるように努力します。

隣の彼（前書き）

不定期更新で申し訳ありません。こんにちは、笑うパンダです。
話数は変わってますが、中身は変わってないので気にしないでください

隣の彼

ガヤ、ガヤ、ガヤ

「漣さんだ」「何で走っているのだろう?」「ああ、漣様の走る姿、うっ、美しすぎ」

周りの騒ぎをなんのその私は全力で彼の後を追った。
そして、今、2―Eと書かれたプレートが掛けられた教室の前にいる。

「はあ、はあ、はあ」

いつ、いきなり走ったせいで心臓が、くっ、苦しい、
いくら焦っていたとはいえ、全力疾走はするものじゃなかった

私は体を落ち着かせて、改めて前を見た。

2年E組

うかつだった

この中学の2年のクラスはA～Eまでの5組に振り分けられている。
その内、A～Cは1階で、D～Eは2階である。
そして、私はD組、まさか、隣のクラスだったとは
なんで今まで彼に気づかなかったのだろう

そんなことをぐるぐると考えていた私に不意に声がかけられた

「大丈夫か、漣？」

ハッとして私は声の方向に顔を向けた

声をかけた角刈りの男子生徒が心配そうにこちらを見ている

そういえば彼もE組だった

体はがっしりとしていて、肌の色は少し黒く焼けている。いつもグラウンドで練習する陸上部員らしい姿をしている

この男子生徒は武田博之^{ただひろゆき}、通称ヒロ。彼は紗枝と一緒に、小学校からの幼馴染である。ちなみに唯一の男の子の友達である。

「だっ、大丈夫よ。ヒロ」

ヒロは心配顔のまま改めて聞いてきた

「そんなに息を切らせてどうしたんだ？」

「・・・」

うーん、なんて答えようか

（「好きな人を追い懸けたせいなの」）

なんて絶対言えない

ヒロは私が答える前に、続けて言ってきた

「周りが驚いてきたぞ。漣が全力疾走で来たって」

「えつと」

私は徐おもむろに周りを見渡した

男女問わず、生徒たちがこちらの様子を見るために集まってきていた。教室から顔を出している者もいる。

あの彼は顔を出していないか

大部分は私の方へ視線を向けているが、生徒の一部は明らかにヒロに嫉妬の視線を向けている

風の噂で、私と普通に話せるヒロはかなりの幸せ者だとやっかみを受けていると聞いたことがあるが、私はヒロを見ていると不幸だと思う。なぜなら・・

「零っ！」

突然後ろから大きな声がしたので、私とヒロはすぐに声の方向を見た

「「あっ」」

紗枝だ

「もう、急に走るんだから、驚いたよ！」

しまった、紗枝を置いて来てしまったんだった

「ごめん、紗枝」

「はー、いいよ、もう」

紗枝は呆れた顔で答えた

「さっ、紗枝」

うずうずと、ヒロは紗枝に言った

「うん？あっ、おはよう、ヒロ！」

「おはよう、きよ、今日も元気がいいな」

「そう？まあ、これが唯一の取り柄なんだけどね」

ボソッ「それだけじゃねえよ」

「んっ、なんか言っただ？」

「いやっ！なんでもない」

小心者。まあ、気づかない紗枝の鈍感さもどうかと思うけど

「それより、漣！うちのクラスに何か用なのか？」

話を逸らしたな

「そうよ、漣。なんで急に走りだしたの？」

さっきと違い、頭が冷えたので、私は冷静にごまかす。

「猫を見たのよ」

「「猫？」」

二人は同時に反復した

「そつ、学校に入ってくるのをみたのよ、だから」

「漣、そんなに猫好きだったわけ？」

紗枝は意外そうな顔で言った

「違うわよ、先生達に見つかったら、手荒く追い出されるんじゃないかと思つて。ほら、相沢先生なんてかなりの動物嫌いだったじゃない」

「ふうん、そうだったんだ」

「確かに、相沢の奴は子犬でも叩き出しそうな感じだったもんな」

二人は納得したようだ

キンコーンカーンコーン

学校の鐘が鳴っている

「やばつ、授業が始まる！行こう、漣」

「うん。じゃあ、ヒロ」

「おお、じゃあな。紗枝、部活で」

「うん、部活で」

二人は同じ陸上部に入っている

私と紗枝は急いで席に座った

「今日の一限ってなんだっけ？」

紗枝は顔を向けて聞いてきた

「古文だよ」

紗枝は嫌そうな顔をした

「うわー、眠っちゃうな」

そーいえば、彼のクラスはなんだろうな。

数学だったかな？

まあ、そんなことより、彼の名前だ。どうやって知ろう

同じクラスのヒロなら、わかるかもしれない

隣のクラスだから、すぐ聞くことができるな

そうか、すぐ、隣に彼はいるんだ。

「ふふ」

私は隣の彼を想像することに少しの幸せを感じながら古文の用意をした。

隣の彼（後書き）

なかなか進みません。もう少しで彼の話が出てきそうなのですが、まだ、しばらくお待ちください。

彼の風景（前書き）

こんにちは、笑うパンダです^^
やっと、彼の話を少し書くことができました。

彼の風景

ある教室で、ちょうど、1限の授業が行われていた

「えゝこの公式を当てはめれば・・・で・・・あるから・・・」

喋る教師とある程度聞く生徒、その相互関係が成り立って授業は成立している。

その中で教師の授業を聞き流しながら、頬杖を付いている男の子が窓際の席に座っていた。

彼は特に授業がめんどくさいという雰囲気ではなくって授業は義務であるかのようにただ、外を見ていた

窓の外のグラウンドは別のクラスの生徒達がマラソンをしている。先頭の方を走っている運動部グループ、その後は、自分なりのペースでゆっくりと走る人、最初で飛ばしすぎてせいぜい言いながら必死で走っている人、最初からやる気のない人などがある。

これは、それぞれのどのような生活を送っているかが分かる縮図だ。

が、彼はそれに関心があるようではなく、ただ見ていた。

走っている1人1人ではなく、グラウンドで起こっている場面を観察するように

独走、ビリ、監視する体育教師、その上に広がる青空、それぞれが起こす領域が干渉し合い、事象をつくりあげる。

昨日、読んだ本「干渉事象」にこのような内容が書かれていた

ここの図書館は中学校にしては、蔵書量が多く。過去、寄贈された本の中に中学生に何を思ったのか、専門書も数多くある。

彼はその専門書読むため、よく、ここの図書館に通っている

ふと、彼は昨日の出来事を思い出した。

確か白柳漣と言ったか、全校集会で見た時の印象は優秀な人だと判断したのだが、いきなり、自分に告白してくる程、突発的な性質を持っていたとは意外だった。

だが、それだけである。

多感な中学生は付き合うという話を聞くと興味ないように見せている人でも、興味を持たざるがえないと言える。

中にはそんなものは必要がないと頑ななもの、付き合うということ事態まだ理解していない者もいるが、少なくとも上代葉かみしろようという人物はそんな未熟な者ではない。

彼は人々にとってそれが重要であることは理解している。しかし、彼自身は必要性を感じず、ただ、自分という存在が認識できていればいい

つまりはそういうことなのだ

彼はただのずれた人間でもないし、ちやほやされるただの天才でもない。自分という領域を理解した異質な人間である

だから、彼はただ、外を見る。すでに自分にとって意味のない授業を聞き流し、次はどんな本を読もうかと思いつながら

「上代」

教師が不意に声をかけた

「これを答えてみる」

チョークを持った手で黒板に書かれた問題を指す

この教師は、たまに全く解けない問題を生徒に押し付け、わかりませんと言わせることがある。それが快感らしい

それから考えると学力コンプレックスも持っている傾向があると考え

えられる。

原因は過去にあるのだろうか、ここでは意味はない。

しかし、正答を言って、つまらない嫉妬をもらうのも意味がない

だから、ここはこつしよう

「わかりません」

知りたい彼

「あゝあ、屋上で食べたかったな」

綺麗なポニーテールをたなびかせて、椅子にすわっている紗枝が袋に半分入った食べかけのパンを片手に、顔を上げて、残念そうに言った

「まあ、仕方ないだろ。いくら、まだ、暖かいと言ってもな」

角刈りとがっしりとした体つきをしているヒロが紗枝を宥めた。彼も片手にパンを、また片手には野菜ジュースのパックを持っている。

「今の時期は、屋上は冷たい風が吹き始めているから、風引くわよ」
肩まで長いつやつやとした髪と落ち着いた雰囲気漂わせている漣がひざの上に弁当を広げた状態で、箸を片手に言った。

「もう、秋なんだな」

紗枝がしみじみとした感じで言った

*

私たち幼馴染3人は、いつも暖かい時期は屋上で、寒い時期は生徒会室の隣にある会議室で、昼ご飯と一緒に食べている。

秋に入ったばかりの今は、まだ、暖かいので屋上で食べるようにしていた。でも、肌寒い風が吹いていたのでやめにしたのだ。そろそろ屋上はだめだ。

今いる会議室は、生徒がたくさん集まる人気の屋上と違い、私たち3人以外誰もいない。

それは当然である。ここは基本、入ってはいけない場所で鍵もいつも掛かっている。

では何故わたしたちが入れているかというと、これは副生徒会長である私の特権みたいなものだ。

この会議室は主に文化祭、体育祭などの行事に生徒たちが使う場所で、鍵は生徒会長が管理することになっているが、前も言ったように生徒会長に私を頼ってやっているの、自然、鍵も私が管理する羽目になっている。

「それはそうと」

ジロツ

たわいのないことを話していると、紗枝が思い出したように、こちらを睨んできた。

「何？」

私は首を傾げながら、理由を聞いた。

「何で起こしてくれなかったの？」

ああ、今日の4限の英語の時のことが

私は睨まれた理由を思い出し、こちらには全く落ち度がないことだったので、反論した。

「起こしたわよ。でも、もう限界って言って、聞く耳持たず、だつたじゃない」

席が近くにいる私は紗枝が授業中に眠ってしまった場合、起こしてあげるのが、日課になっている。

今日はなんとか眠らずに1〜3限を乗り越えた紗枝は、4限の英語において遂に限界を迎えたらしく、夢の国行ってしまう、そして、先生に怒られてしまった。

というか、起こしてあげようとした時点で、私は全く悪くないのでは？

「う〜」

紗枝は自分の落ち度であることを理解しているのか、悔しそうにこちらを見る。

「野々村め、小言をぐだぐだと」

「自業自得でしょ」

野々村とは英語の先生のことである。

「そつ、そりゃ、災難だったな」

ヒロは少し呆れたように言った。

「そう災難だったの、陸上部の練習が大変じゃなかったら！」

紗枝は何かの被害者のようにしおらしく言った。

「何を言っているの」

「けど私は同調しない」

「ヒロも陸上部なのに眠ったりしたことないじゃない」

今は、ヒロとはクラスが違うが、1年のときは一緒だったので、彼が寝たのは見たことない

「それについては援護できないな」

ヒロも同じ考えなのか私に同調する

「あゝ、私が悪うございました」

そう言つて机においてある牛乳を引つつかんで一気に飲む

ヒロと私はそれを見て、笑つた。

「そついや、うちのクラスも初っ端からめんどくさかつたな」

ヒロが嫌な顔をして思い出すように言つた

「あゝ、数学の相沢でしょ。また、誰かに嫌がらせしたの？」

私たちも相沢の嫌がらせを授業で見たことがある。

「ああ、上代つてやつにな。高峰が解けないつていうほどの問題を突きつけてな。」

高峰隆一は成績上位者の常連で毎回、学年1位を私と争っているほどの人だ。大抵、1位は私になるが、たまに彼に1位を奪取されることがある。

「上代君つて？」

初めて聞く名なので、紗枝が興味深そうに聞いた。

その名は私も聞いたことがない。まあ、知らないってことは学校で目立ってない普通の人だろう。

「ほら、結城といつも一緒にいる？　少し影が薄いやつだよ」

ヒロはわかりやすい結城を持ち出して言った。

結城君の隣にいた人ね・・・・・・・・・・

「ッー！」

彼のことか！

私はいきなりのことと驚いたが、何とか驚きを隠せていたので、紗枝やヒロは気にせず話を続ける。

「あゝ、結城君の子分みたいな人ね」

思い出したみたいで、紗枝が感じたままのことを言った

「実際、どんな人なの？」

ナイス、紗枝！

「子分って・・・・、んっ、ん~~~~、よくわかんねえ」

ヒロは苦笑しながら、考え込んだ。

「これといって特筆するべきものがないんだけどな。でも、あいつ1年のときから結城とつるんでいるのが不思議なんだよな、全く

怖がらずに。」

「ふん、1年のときからの付き合いなんだ。すごいね」

確かに、今でこそ結城君は温和な人と周囲は認識しているが、入学した当初はえらいやつがはいってきたと、ほとんどの生徒たちから怖がられていた。私たちも当初は、正直言っただけ怖がっていた。

「ほつ、他には？」

彼のことが少しでも知りたいので、私はヒロに聞いた。

「んん、知らねえや」

ヒロは首を振った。

「まあ、結城君の親友ってことだね」

紗枝が話を締めた。

ヒロの役立たず

上代君か、名前はなんていうんだろう

まあ、ここまで、わかれば後は簡単だろう。

*

と思っていたけど、なかなか彼について知ることができず。10日たってしまった。

どうしてかというと、季節は秋、体育祭まで1月である。その準備に生徒会は追われてしまっている。

当然、副生徒会長である私が仕事をしないわけにはいけないので、放課後はそれ以外にもできない

仕事をしている間も、何とか情報を得ようと、さり気なく彼と同じクラスである生徒会役員に聞いてみた。

しかし、結果はヒ口と同じような情報しか帰ってこない

ああ、一つだけわかった。名前は葉君はつというらしい。それ以外は結城君のいつも横にいる地味な人。

「はあっ」

授業が終わったHR後、私は盛大にため息を吐いた

やっぱり、きつかけがいるな。彼と自然と話してもおかしくなくらいのきつかけ。

「み〜お!」

急に呼ばれた私は、振り向いた。

そこには満面の笑みをした紗枝がいた。

「何?」

私は笑みの意味がわからないので、いぶかしながら聞いた。

「澪何も言わないで、私にまかせてよ」

わけがわからない

「ちょっと来て」

紗枝は私の手を引いて、人気がない所に連れて行った。

「ちょっと!どうしたのよ」

私は少しいらいらしながら、言った。

「ふふふ」

少し笑い、どうだという顔をしながら、私を指差して、とんでもないことを言ってきた。

「私が彼と話ができるようにセッティングしてあげたから！」

はあ！？

親友の心配とお節介

晴れやかなる青空のなか、不健全にも、授業なんぞ受けている私はチラリと左隣の席を見た。

ツヤツヤしている綺麗な黒髪、白い肌、かわいい目付き、プリツとした程良い色合いの唇、最後にキュツとしたウエストを始めとした幼い感じのモデルスタイル（まあ、胸は私が勝っているな）。このまさしく美少女と言える少女は、何を隠そう私の親友である。

今、彼女は真剣な眼差しで前の黒板と先生を見ている。よく集中力が続くなと私は改めて感心した。

彼女とは小学校からの仲で、クラスもずっと一緒だったのだが、実は席が隣になるのは初めてのことだ。

彼女はなんだかんだ言っても、近くにいと手を貸してくれるので、つい、私は気を抜いて眠ってしまつて、たびたび起こしてもらつてしまふ。だって、近くにいと遷のありがたさが分かつてしまふもん。

まあ、今、考えているのはそういうことではない。というのは、最近、彼女の様子がおかしい。

いつもの様に振る舞つて見えるが、長い付き合いの私には分かる。

彼女は何かを気にしている。

初めは何かを恐れているのか、心配したのだけど、よく見ている

とそんな感じは全くない。

むしろ、彼女自身が何かを焦がれているように感じ………ん？

……焦がれている？ん、まさか、いやなあ

あつ、彼女がこちらを向いて、少し焦っている。私が見ているから、驚いたのかなあ？

私は気にしないで、と手を振って現した。そしたら、小さな声で彼女は言った。

「紗枝、前、前！！」

ん？私は徐に前を向いた。おもむく

「あ〜ん〜ど〜う〜！」

私の席の前に、スラリとした青のスーツを着て、髪をバレッタで止め、赤い色のシャープな形をした眼鏡を掛けた女性が体を震わせて立っていた。

「あつ！せつ、先生」

彼女の名前は野々村 ののむらみやこ 都。内の学校の英語担当の先生だ。

若い先生で容姿もそこに人気があるらしいのだが、いかんせん、真面目すぎる所があるので、少し煙たがられている所もあるのだ。いや、私は基本的にいい先生だから、好きだけど。

「お前が漣と仲がとていいのは、知っている。だが、そういうことは休み時間して、ちゃんと、授業を聞かんか！」

「は、はい」

クスクス、と周りが私と野々村の様子を見て笑っている。漣も呆れた顔で見ている。

うつ、うつ、居たたまれないゝ

*

やっと分かった。

私はグラウンドで陸上部の柔軟体操をしながら、この数日間に分かったことをまとめていた。

最近、体育祭が近付いているので、副生徒会長である漣は、上へ下へと大忙しだ。私の方も、部活対抗リレーで万が一にも陸上部が負けてはならないので、練習時間が長くなっている。

まず、彼女が気にしているは隣のクラスというのが最初に分かった。思えば、おかしい様子を見せ始めたのは、漣が猫を追いかけた

日からだ。その時、隣のクラスの近くにいた。

もちろん、それだけじゃない。感じるのだ、意識がそちらに向いているのを。

生徒会関係で何かあるのかな、と思ったが、それなら、いつものようにテキパキと対応するだろう。

では何なのだろうと、私はそれまでは、分からなかった。

が、今日、ハッキリした。HR終了後のことだ。

澪と私が廊下を出たとき、私達が知っている彼がすれ違った時、明らかに澪はいつもと違う顔を見せて狼狽していた。あんな姿を一瞬だが、小学校以来、久方ぶりに見た。

もう、野暮なことは言わない。

澪は恋しているのだ。

澪は北山中学のアイドルと言われるほど、色々な分野で目立つほど優秀なのだ。

ただ、浮いた話は全く聞かないし、感じない。

となると、納得が行く。

澪はどうやって思いを伝えたらいいのか、分からないのだ。

全くもう、告白したら大抵の男子は落ちないだろうに。

まあ、告白慣れしていても、自分からは全くないことを知っているからよくわかるが。

としたら、協力したい。

いつも、勉強を助けてくれているからというのもあるが、親友なのだ。

できない事は手伝ってあげたい。

私はパツと同じく柔軟体操をしている陸上部男子の方をみた。

幸い隣のクラスには信頼できるヒロがいる。

心地よく協力してくれるだろう。

*

陸上部終了後

「えっ、彼を呼び出して欲しいって？」

ヒロが驚いた顔でこちらを向いた。

「そう。お願いできないかな？」

私は少し上目づかいで言った。

「誰もいない所に呼び出して、まさか、お前！？」

ヒロは私が告白すると勘違いしているらしいので、即座に否定する。

「違うよ。私じゃない」

ヒロは何故か安心した顔でため息を吐いた。そして、今度は疑問を持った顔で言った

「私じゃないって？じゃあ、誰なんだ？」

今、言おうかと思ったが、結果が分かってないので、一応、際し控える。

「まあ、それは報告を待ってよ。」

まあ、大丈夫だろう。

私は含めたその他の女子はわからないが、何を隠そう北山中学のアイドルと言われている白柳 澪なのだ。確率は0に等しいだろう

ヒロはまあいいか、という顔をした。

「それで、出来るの？」

納得させた私は改めて聞いた

「まあ、たまに話したりするから、大丈夫だと思うぜ」

安心しろと手の平を向けた。

「じゃあ、お願い！」

ちょうど、お互いの分かれ道に来たので、一応、釘をさした。

「おう！」

ヒロはこちらに手をあげて、返事を返して帰った。

後は、明日、零に教えてあげれば、完璧だ。

余計なことだと、怒るかもしれないが、彼女はそうしないとはばらく悶々と過ごしてしまうだろう。

これぐらいのお膳立ては必要だろう。

私は頬つぺたを叩いて気合を入れて、ダッシュで帰路に向かった。

きっかけは突然に（前書き）

かなり遅くなってすみません。

きっかけは突然に

ドキドキ！

自分の心臓が激しく脈打っているのが明らかに感じる。

ううう、緊張する。

一度会っているとはいえ、改めて会うとなると、どうも構えてしま
う。

まあ、こないだのはいきなりだったから仕方がない。

今、私はいつもの会議室前にいる。

なぜ、なかなか入れないかというと、理由は1つしかない。

そう、この向こう側に彼が待っている。

*

今に至る少し前。

「彼と話ができるようにセッティングしてあげたから！」

上のように、とんでもないことを言った紗枝を私は踊り場に連れ出
して、問い詰める。

「どっぴうこと？」

紗枝は私の質問に満面の笑みを浮かべた。

「そのままの意味。漣がなかなかチャンスをつくれないうだから、手伝ってあげようと思ったの」

その紗枝の反応に少しイライラしたので、声を荒げる。

「だから、彼ってなんのこと!？」

それでも、怯まず、紗枝は答える。

「またまた、ここまで言っているからわかるでしょ。漣の愛しの彼だよ」

紗枝は自分の体を抱きしめて、愛おしさを現した。

「なっ!！」

私の固まった姿を見て、紗枝は確信を持った笑みを浮かべた。

「やっぱり、そうなんだ。」

言い訳しても、無駄だと理解した私は弱々しい声で聞いた。

「……何でわかったの？」

「いつも通りに振舞っていたようだけど、近くで見てきた私にはわかるよ。漣はしきり何かを気にしているって」

そう言いながら、紗枝は甘い甘い人差し指を振った。

一応、気を配っていたのだけど、やっぱり気のおける友達だと、行動が出てしまっていたのかな。

「はじめは、それほど気にしてなかったのだけど、何日経っても、それが終わらないからきになってね。それでずっと観察していたら、彼とすれ違ったときに漣がかすかに緊張していたのを感じてピンときたの、どうすごいでしょ、この察しのよさ!!」

ええ、凄いわよ。恐ろしいぐらいに

親友は伊達じゃないという貫禄を見せられた気がした。

話が脱線していたので本題に恐る恐る戻す

「・・・本当に・・・彼を？」

「うん、ヒロに“生徒会の用事”ってことで、あの会議室に呼ぶように頼んどいたよ」

私は頭を抑えた。

「・・・ヒロも関わっているの？」

紗枝は両手の平をこちらに向けて、大丈夫と表現した。

「安心してただ手伝ってもらっているだけ肝心な事は教えてないから」

まあ、そうか、知ったらず、私に確認を入れる慎重さをもつのが

ヒロだもんね。

ん、臆病とも言えるかな。紗枝に全く気づいてもらえてないのだから。

……ヒロ、誤解してないといいけど。

「零、余計だったかな」

紗枝は急にしおらしい顔をして私に聞いてきた。

ここまでセッティングしといて何をいつているんだか。

「余けっ！」

感情に任せて余計に決まっていると言おうとしたが、待てよと思い直した。

確かに何も言わず。勝手に彼とのセッティングをしていた。

もともと生徒会の呼び出しという手は私もとくに思いついていた。

しかし、これは今まさに欲しいきっかけだったのではないか？

もともと、生徒会の呼び出しという手はとくに考え付いていた。

呼び出す理由もいくらでも思いつくし、場所も確保できる。

何より副生徒会長なので誰も疑問に思わない。

問題はそれを伝える役目の人だ。

よく考えて選ばないと親しい人からでも、下らない噂が広まってしまう。

ましてや、私の場合は高速、いや音速だろう。

その場合、私はいいが彼に意識が集中してしまう。

もしかしたら、私のファンのやつかみを受けるかもしれない。

そんな迷惑かけたくない。

だから、心のおける幼馴染2人は適任だったのではないだろうか。

このように自分の問題を解決してくれこそ、困ったことを起こした訳ではないのだ。

そんなに責めることはできない。

「零？」

不安な声で紗枝は声を掛けてきた。

「余計な事だったけど、実際助かった。でもね、そういうことは事前に確認して、知らないところで進められるのは、嫌だよ。」

「うん、ごめん。零のことだから、また、ウジウジ悩んでいるんじゃないかと思って急いだの。こういうことは勢いが必要だから。後悔するにしろ、しないにしろ。」

「……確かにね」

紗枝の言葉に感心していたら、ふと、疑問が浮かび上がってきた。

「そついえば会議室の鍵はどうしたの？」

会議室を使うためには鍵が必要なのだが、持っているのは基本、私なので使えないはずだ

いつも、一緒に使う紗枝達が気がつかないはずなのだけど……まさか。

紗枝はスカートのポケットを探って鍵を取り出して見せた。

「ごめん、借りてた。」

やっぱり

私はため息を吐いた。

まあ、もういいけどね。

紗枝が周りを見回して、時間が立っていることに気がつく

「そろそろ行った方がいいよ。」

「あつ、そうね。」

紗枝は急に真顔になり、私に言う。

「漣、正直彼つて知ったとき、こういう人が好きなのかって少し驚いた。でも、漣自身が選んだ人だし関係ないよね。頑張つて応援しているから。」

「紗枝、ありがとう」

彼女の純粋な言葉に私は素直に感謝した。

「それに、釈迦に説法だと思うけど、漣が本気だせば、告白は絶対成功するよ。それだけの魅力を備えているんだから」

そう言つて紗枝は右目でウィンクした。

「・・・紗枝」

「さあ、行つて、行つて。私はこれから部活だから結果は後日おしえてね。じゃあ！」

「・・・ありがとう、紗枝」

でも、ひとつだけどうしてもいいかった、いや言わなきゃいけないかったことがあるのよ

なんだか、ごめんなさい。その魅力をはがにもかけられずにふられ

ているの・・

言っていたら、諦めろって、昔みたいに怒鳴られたかな？

*

私は紗枝とのやり取りを改めて思い出し、ドアを見る。

確かに私は１度振られている。

でも、このきっかけで、生徒会の仕事についてなどでいいから相談して、ある程度話せるようになり、そして、彼を知りたい。

私は手のひらを握り締めた。

よし、行こう。

私はドアの引き手に手をかけて一気に開いた。

ガラッ！

「待たせたわね」

ガタッ、ガタン！

前の方で椅子がぶつかる音が聞こえる。

焦って立ち上がったようだ。

「えっ、みつ、澪さん！！ いえ、副生徒会長、全然、待っていません。」

そういつて、彼は明らかに中学生とは思えない大きい体を強張らせながら、両手の平を前に出して、ごつい顔をぶんぶんと横に振った。

んー？大きな体、ごつい顔……誰？

私は一瞬、明らかにわかりやすい特徴を持った目の前の彼を認識できなかった。

きっかけは突然に（後書き）

これから数話はすぐ投稿できると思います。

彼に近づく者（前書き）

彼の視点です。

彼に近づく者

「もうすぐ、体育祭の準備期間に入る頃だが、浮かれて怪我などしないように以上、HRは終わり、日直」

「起立、礼」

「「「ありがとうございます。」」」

担任である野々村 都の話が終わると日直が即座に動いて、HRを終わらせた。きっちりとした担任が好む流れ。

これで、この学校の本質の1日が終わった。学校は学校の知識を手に入れるところ。

それ以外のことは根本的に、生徒というよりも、ただ個人のためのもの。

実際、ここにいる生徒たちはこの知識を使って、将来に向かっていく、それ以外の生きた知識を早々に使えるのはごく一部。

教科書を片付けていると、いつもどおり、結城 輝幸がこちらに近寄ってきた。

「上代君は、これからどうするの?」

「図書館に行くよ。」

特にするべきこともない。

「そうなんだ。じゃあ、今日は一緒に帰れないね。」

結城 輝幸は残念そうな顔をした。

「妹？」

早く帰る理由と言えば、彼には妹と料理の事以外ない。

「わかったの？そう、今日は両親が遅くて、僕が鈴の夕飯を用意しないと。これから、買い物いくんだ。」

彼の料理の腕は、中学生にしては高い方だろう。レパートリーも多く、以前食べたチョコレートケーキは中々の味だった。

味を思い出していると男が一人こちらに、近づいてきた。名前は武田 博之だったか。

「よう、結城」

「ああ、武田君、何？」

「さっき、生徒会から用があるから会議室に来てくれて」

そう言いながら、短髪の頭をかいた。

それに対して、結城 輝幸は顔をしかめた。

「生徒会から呼び出し・・・僕何かやったかな？」

武田 博之はそれに否定の返事をする。

「いや、俺が感じた限りではそんな感じしてなかったぞ。何か話したいらしかった」

「上代君はどう思う」

武田博之を見る。少し汗をかいている。

どうやら緊張しているようだ。

それに話しも不自然だ。ここの生徒会はしっかりしている前に見たが、役員が案内をするだろう。

まして、彼には初めての呼び出しだ。いきなり呼び出すにはそれらしき雰囲気をだす。

嘘をついている

・・・がさほど気にするものでもないのだろう

理由はわからないが、武田博之はこのクラス内では一本が通っている人だと認識されている。

嘘自体も親しい人に頼まれたのか、吐かざる得ない理由でもあるのか。

恐らく前者の可能性が高いが、それにしたって緊張が少ない。

真面目で、律儀で、堅実である男が友達でもない結城 輝幸に害を及ぼす可能性は例外を除いて低い。

であるならば、自分は関与しない。

「さあ、わからない」

ガタッ

そう言つて自分は席を立ち上がった。

武田 博之が声をかける。

「おっ、行くのか？」

自分は二人に向かって返事を返す。

「ああ、じゃあ」

それに二人がそれぞれ答える。

「うん、また明日。」

「じゃあな」

そのまま、カバンを肩にかけ、図書館へと向かった。

*

いつもどおり、上代 葉は図書館の奥にある蔵書を読んでいる。

その姿は忘れられた本と共に消えそうな雰囲気をかもし出していた。

自分は新しい本を意識的に読まないようにしている。

例外として両親が買ってくれた本は目を通した。

嫌いというわけではない。

ただ、情報が確かではないだけ。

逆に、古い本は読む。

なぜなら、時代というふるいに掛けられてより自分が求める確立したものが残るから。

新しい本が劣っているとは思っているわけではない。

それらは常に変化を求められているから多様性という利点をもっている。

しかし、自分にとってはあまり価値がない。

確かなものを求める自分には……。

「かゝみしろ君」

誰かが楽しそうな声をかけて来た。

「?」

その人物に顔を向けたら、女のズームした顔が覗き込んでいた。

その女の子はショートカットで、クルリとした目つきをしていた。

「何?」

「さゝなんだろ?」

彼女は、顔を離れたあと、首を傾け、はぐらかした。

「……」

「ごめん、ごめん、私同じクラスの石原理穂子」

彼は気を悪くした様子はなく、ただ、彼女を思い出そうといた。

今、自分の左後ろの席の男子女子共に気軽に話している明るさが印

象的な人物。

興味を持ったことがないので、それ以外の情報は思いつかない。

ただ、彼女がどんな用なのか、それだけ。

「石原さん、何の用？」

「理穂子でいいよ。用ってほどじゃないんだけど、君ってよく図書館で見るから、今日になって、話しかけたくなって」

「ふん」

特に感心していない返事を返した。

「上代君っていつも奥の方の本棚に行くけど、前の方の最近の文学本は読まないの？」

「たまに読むよ」

必要な時以外は読まない。

理由はいつもりはない。

「やっぱりね」

それに対して彼女は納得した顔で言う。

「？」

石原 理穂子という人物はよくわからない。

「おもしろいね、貴方！」

彼女は、笑顔でそう言い放った。

「・・・・・・・・」

「初めは猫かぶって気取っている人かと思ったけど違う。全部本当なのね。あなたは」

急に自分の事をそう評価したので、思わず否定する返事を返してしまった。

こんなことは久しぶりだ。

「矛盾しているね」

「そう矛盾しているの」

彼女は雰囲気を変えて、淡々と言った。

「うーん」

それから腕を組んで、目をつぶって考え込んだ。

そして、目を開ける。

「決めた！」

「？」

「明日、暇？」

「何もする予定はないよ。」

特にすべきことはない

「ならどっか行かない？そう街でデートしよう。」

「……………」

何故か即座に答えられなかった。

何だか気になる。

「ねっ、いいでしょ」

どうも、彼女の言葉に引き込まれる。

「……………かまわない」

ガタッ

本棚の向こうで微かな音に上代　葉は即座に反応して、その方向を向いた。

・・・誰いた。

今の話を聞かれていたようだ。

いつもなら、最初に気がつくはずだが・・・この女の影響か・・・。

「どうしたの？」

石原　理穂子気がついていない。

「いや」

まあ、特に問題はない。

先の人がこちらにどんなアクションをとったとしても、自分は侵せない。

「まあ、いいんでしょう？よかった」

彼女は手を合わせて喜びを表した。

「だが明日は雨だ。大丈夫か？」

天気予報の情報では明日の降水確率は30%。

振るかもしれないし、ふらないかもしれない。

自分がかまわないが、彼女は気づいていないだろう。

「大丈夫！明日ははれるわ。私晴れ女なの。まあ、もし降ったとしてもいいじゃない。雨の中のデートもロマンティックよ」

ロマンティックね、変わっている女の部類のようにみえるが。どうも彼女は何か引き込まれる

だから、のつてみたのだが。

不思議な彼女をみて、一層、疑問が浮かび上がってくるのを感じた。

彼に近づく者（後書き）

次話は4日後に投稿できそうです。

将を射んと欲すれば先ず熊を射よ（前書き）

PV1万台突破しました！！

読者の皆様、どうも、ありがとうございます！！

これからも、拙い自分に活を入れて頑張って行きたいと思います。

前話を修正しました。

文化祭じゃなくて体育祭でした。

将を射んと欲すれば先ず熊を射よ

私は会議室の椅子に座り、盛大なため息を吐いた。

紗枝……、何かあなたらしいわ。

いつも、良いとこまで行くのに、最後に盛大にこけてしまう。

勉強しかり、委員会しかり、テストしかり、生活しかりね。

例外としては陸上じゃないかしら。

あのドジな親友の事を浮かべていたら、声を掛けられた。

「あつ、あの僕に用事って何のことでしょうか？」

私の前にはとても中学生とは思えない体格をした結城君が恐縮そうに座っていた。

「ああ、ごめんなさい。楽にして頂戴」

まあ、彼じゃないにしても、結城君は彼の友達なのだから、よく知っているのかもしれない。

「ちょっと、聞きたいことがあるの」

「聞きたいことですか？」

「そうあなたの友達の上代君のことなんだけど」

「僕の友達・・・へへ」

“友達”という単語が嬉しいのか結城君は言っては悪いけどゴッイ顔を笑みで埋め、照れている。

「結城君？」

「あつ、はい、上代君のことですよね・・・」

「どうしたの？」

「いえつ、あの、何て表現していいのか？」

「？」

どうしたんだろ？

結城君は両手を膝の上に置き、ウジウジしながら、喋り始める。

「変わっているってわけでもないし、話も合わせて喋ってくれるし、別にとくに何かがあるわけでもない・・・のですが、・・・何かが違うと思うんですよ。」

・・・どういうこと？

「あつ、すみません。何言っているんだか。悪い意味ではないです。ただ、・・・わからないってことですかね？」

聞かないですよ。

「そう……なんだ」

私は彼もよく知らないのかと肩を落とした。

彼がはつとした顔をした

「あの、いまさら何ですけど、上代君の事を何で調べているのですか？」

聞いてきたか、まあ、当然か。

「あつ、調べているってわけじゃないの。ただ、個人的な事かな」

私は予め考えていた理由を述べ始めた。

「個人的なことですか？」

結城君は首を傾げた。

「いや、まあ、副生徒会長としてでもあるかな。彼をみたとき何だか暗い感じがしたから、何だか心配で、それで友達であるあなたに尋ねたの」

影を薄そうなのは、暗いようにみえたのを同義ととっても問題ないとおもう

「はい、すごいですね。常に気を配っているんですか？」

「まさか、ただの偶然よ。だから、個人的なの」

納得したのか結城君は再び喋り始めた。

「あの僕は表現できないって言いましたけど、上代君自体は心配ないと思いますよ。むしろ、何かあったら自分ですぐ解決をします。それに人のありのままを見てくれる貴重な人です。彼のおかげで僕も救われましたし。」

と純粋な目で私に語りかける。

こっ、この人、いい人だ。何だか嘔吐している自分に罪悪感が

「そうなんだ。よかったわ、余計な心配だったみたいね」

私は必死に取り繕い、安心を見せた。

「はい」

「上代君っていい人なんだね。一度話してみたくなっただわ」

本当に。

「あつ、それなら、今日、図書館にいるって言っていましたから、今から会ってみたらどうですか？話してみたら僕の言っていることがわかります！……かも。」

かもか

「でも、いきなり、あって話したら困るんじゃないかしら」

まして、私は告白した人だ。かなり気まずいよ。

「だいじょうぶですよ。上代君は、余程のことがない限り、大抵は返してくれますから」

そう言つて自身をもつた顔で答える。

「そうね、じゃあ、行つてみるわ」

そう言われるとなんだか、大丈夫な気がしてきた。

「じゃあ、上代君によく言つといて下さい。」

「あなたは来ないの」

「いえ、僕は早く家に帰らないといけないので」

「何かあるの？」

「今日、親が遅いので、妹に夕食を作らないといけないんです。」

へえ、妹さんがいるんだ。

正直、少し安心した。

彼の前にいくと色々なボロが出てしまいそうだから

「それならごめんなさいね。時間とらせちゃって」

「気にしないでください、では。」

*

結城君と別れて、私は図書館にまっすぐに向かっている。心なしか早足になっている。そうだ、下手な小細工をせずに直接話してみよう。

図書館に着き、大きな音を立てないようにゆっくり入る。

確か、あそこの本棚の奥にこないだはいたんだね。

また、あそこらへんかな？

その方向にどんどん歩いていくと、不意に聞き覚えのある声が聞こえた。

あれ？この声は、彼じゃないかな。

私は思わず、それに耳を傾けてしまった。

「ならどっか行かない？そう街でデートしよう。」

「………かまわない。」

將を射んと欲すれば先ず熊を射よ（後書き）

次話は7日後の投稿になりそうです。

熊と鈴

僕は夕食の買い物を終えて、家に着いた。

「あゝ、疲れた」

たくさん買った食材をテーブルに置きながら、ポツリともらした。

普通2人分なら重たくはならなかっただろうし、僕もこんな体格だけど、小食だ。

しかし、僕の妹である小学6年の結城^{ゆづき}鈴^{すず}は違う。

見た目はとても小さく、ツインテールの髪型、クルリとしたかわい
い顔をしている。

そんな子が、僕の3倍は食べるのだ。

運動するのが好きだとはいえ、いったいどこに入るのだろうか？

トトトトト。

そう考えていると2階から降りてくる音が聞こえる。

「兄ちゃん、おかえり〜」

台所に鈴がヒョコツと出てきた。

「ただいま」

「今日のご飯は何？」

「秋鮭が安かったから、味噌煮でも作ろうかな」

「えゝ。ねえ、ムニエルにしよう、ムニエル」

「んゝ、そうしょうか」

「やったー、と喜ぶ鈴は両手を挙げて、ジャンプをした。

「……すごいジャンプ力。

ふと、僕は鈴に言ってみる

「たまには料理手伝わない？」

「嫌。」

「早!」

「だって、私が手伝うと味が下がるんだもん」

「すつ、鈴も女の子なんだから……」

「兄ちゃん、古い!今時、そういうのはだめだよ!」

「んゝ、でも、出来たほうが後で困らないし、鈴も将来は結婚する

んでしょ……」

「大丈夫！いざとなったお手伝いさんを雇うから、漫画でもそういうのあるでしょ？」

「いや、あまり読まないからわからないけど。」

いいのかなあ？こんな達観していて

「そんなことより、兄ちゃん。明日、葉^{よう}さんの所に遊びに行かない？」

葉というのは上代君のことだ。

……前から思っていたんだけど、僕も呼び捨てたこともないのに、先に呼び捨てって

「そうだね。じゃあ、明日、上代君にいいかどうか聞いてみるよ」

ツルルルルル、ガチャ。

「へーい」

野太い声の人が出てきた。

この出方は徹^{てい}さんだ。

仮にも大人なんだから、ちゃんと出なくていいのかな？

「もしもし、結城と申しますが、葉君を「おい、葉、輝幸から電話だぞ」「

一応、最後まで聞いてよ

少ししてさっきと全く違うすっきりとした声の人に代わった。

「はい」

「あつ、上代君？」

「そうだよ、何の用？」

「明日、鈴と一緒に遊び行っていいかな？」

「無理。明日は用事がある」

「あ、そうなんだ。残念」

どんな用事が気になるけど、聞くのもなんだか気が引ける。

そういうところが僕の悪いところだと思うんだけど、性格なんだから仕方ない

「ああ」

「そうだ、今日、図書館に誰か尋ねて来なかった？」

澪さんが来たはずだけど

「ん？来たけど」

「何も問題なかった？」

「……俺が図書館いることを教えたのか？」

「悪かったかな」

少しドキリとした。声色はいつもと変わらないけど、言葉の感じが責められているように感じる。

「かまわないし、問題も起こっていない。それに、君の想像しているような不快も全く感じていない。」

思い過ぎしを見透かされていた。

「そつ、そつ、良かった。」

「じゃあ、そろそろ夕御飯作らなきゃいけないから」

「じゃあ」

ツーツー

「ふー、鈴。用事があるから無理だつて」

「ええー」

残念そうに表情を歪ませるも、すぐ顔を戻した。

「まあいいや、今度で。明日はケンジ達とでも遊ぼう」

切り替え早いな。

まあ、それが鈴のいい所なんだけど

僕は明日、どうしよう。宿題は当然しなきゃいけないけど、それ以外は……お菓子でも作ろうか

和菓子に挑戦して見たかったんだよね

熊と鈴（後書き）

次も1週間後になりそうです。

彼の朝

学校が休みの朝。

ある家の勉強机と大きな本棚が置かれている和室の部屋に、布団が敷かれている。

その布団は盛り上がっており、呼吸音と共に上下に動いている。

カチ、カチ、カチ、カチ・・・・・・・・

壁に掛けられている時計の秒針の音が静かな朝の雰囲気には響いていない。

時刻は6時24分・・・・・・・・カチッ！ 時刻は6時25分変わった。

それと同時に布団にいる上代 葉が、もぞもぞと動き始めた。

彼はパチリと目を開け、そして上半身を起こした。

その状態で少しぼーっとしてから、そのまま立ち上がり、背伸びをする。

「んー・・・・・・・・行くか」

そう呟いた彼は、スタスタと部屋を出て行った。

ザッ、ザッ

彼は軽い白い着物姿で周りが草木が生い茂る石畳を掃いている。

ザッ、ザッ、ザッ

これは彼の朝の日課である。

「毎日、毎日、ふ、ふあゝ、よくやるなあ」

そんなふうになく伸しながら声をかけた人物は玄関に寄りかかっていた。

ボサボサ頭に眠そうな目、服装は袖なし羽織の藍色のよれよれのジーンベエを着ている一見軟弱な男に見えるが少し盛り上がった筋肉が鍛えていることを伝えている。

「約束だから。それに整理も兼ねているから、苦痛でもない。」

「そうかい」

男は適当に返事をした。

「これは……じいちゃんが言っていたことでもある」

「確かにあのジジイが言いそうなことだな」

「それで用は何？」

「朝飯できたから、すぐ来い」

そういうと男はすぐ中に入って行った。

そして、彼は竹箒を片付け始めた。

*

畳の上におかれた座卓に、御飯、味噌汁、煮干魚、沢庵などの朝食が置かれている。

男と彼はそこに男は親父座り、彼は正座で向かい合った。

「いただきます」

それと同時に食べ始めた。

もぐもぐ、もぐもぐ

「ずずー……ん、味が濃い」と彼が呟いた。

それに男がムツと言う。

「お前が当番の時の薄味を我慢してるんだから文句言つな。」

「我慢させているつもりはない」

「ふん」

「ごちそうさま」

先に食べ終わった彼は、すぐさま食器を片付けようとする。

それに男が疑問をかける。

「もう行くのか？珍しいな、いつもならニュースを見るのに」

「今日は予定がある。」

「ほー」

「10時頃に待ち合わせているから、1時間後に出る」

「どっか行くのか？」

「糸尾町に行つて来る」

「隣町か、あのでかい子と行くのか？たまには女の子でも誘ってデートにでも行けよ」

男がニヤニヤしながら言った。

それを彼は無視して答える。

「違う。石原理穂子という同級生」

彼の淡々とした答えに男は一瞬固まった。

それにかまわず続ける。

「彼女が言うにはデートらしい」

「ぶっ！」

「きたない」

男は、はーと言って不思議なものでも見るような目で彼を見た。

「正直お前はないと思っていたが、男なんだなあ、やっぱり。」

「そうかもしれない」

彼は肯定するような、否定するような曖昧な返事を返した。

「・・・違うのか」

その曖昧な返事でいつもと違う雰囲気を感じた男は問いかけた。

「何か・・・気になる。彼女の言動、行動が自分の存在に入り込んでくる。」

「・・・」

男は考え込んでいる。

「だが、これは一般で言う恋とは根本的に違う・・・と思う」

男はため息を吐いた。

「まっ、いい傾向じゃねえか、兄貴も喜ぶぜ。行って来い」

「うん」

彼は話が終わると準備をするために部屋にいった。

残った男はこめかみをかきながらポツリと言った。

「まあ、あいつが普通なやつらと同じ感覚をもてるわけないもんな」

男は盛大なため息を吐きながら彼のことを嘆いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6876k/>

高嶺の彼女と異質な彼

2010年10月12日02時22分発行